詩集

コスモロジー・デッサン

紙田 彰

目次

I　直観的な

偶然の連鎖と消失　2

（偶然）　5

（まず、偶然にも）　6

（始まりに）　8

（無から）　9

無の消失　12

diffused reflection　14

（物質は）　20

（直線、矩形は）　22

もの（存在）が　24

（地下室といえども）　25

（白昼の光線が）　28

（境界のない絵）　30

作品「Hybrid construction」のそれぞれの宇宙軸に附するべき注釈　32

（space：構造宇宙）　33

スーパーシンクレティズム　35

（単純明快なものは）　36
（自由とは何かの考察）　37
（自由とは何かの考察）　38
（自由とは何かの考察）　39
（自由とは何かの考察）　41
（諸システム）　42
身体と肉体　44

II　解放衝動——モナドを基点に
（存在は）　46
存在の単位　47
単位と包含　49
刻印　51
（絵を描くという行為は）　53
（明け方から削り始める）　55
存在と宇宙論　57
primitivity：原初性　59
（スクラッチングは）　61

III　超ひも理論の方へ

（意識、肉体、宇宙）　64
（折り畳まれた次元）　65
思考は物理的に存在する　66
（光が折り畳まれ）　67
作品“Super-string Theory”についてのメモ　69
浮游するオブジェ　71
息を吹きかけたとき　73
（選択的実在というはがれが）　75
意識と思考の分離――思考子と思考波　77
（実在とは）　78
時空の枠組みが光速である　79
（死ぬまでに知りたいことは）　81
（作品について）　83
（作品に取り囲まれるということが）　85
「宇宙音楽」のビッグクランチ（ビッグクランチ）事象地平　87
恐るべき瞬間の時間サイズ　89
無限点について　91

実在というプランク・サイズ　93
タマネギ理論　95
次元のかたまり　1　97
次元のかたまり　2　99
意味と絶対的外部客観　103
重ね合わされた次元　105
Ｉ氏への書簡１　106
思考と意識　112
思考と「見方の問題」　115
次元を折り畳む　117
Ｉ氏への書簡２　119
身体というかたまり　126
次元のかたまり　３　131
跋　132

I　直観的な

偶然の連鎖と消失

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

〈偶然〉

「これまで」の経緯は必然であるが、「これから」は偶然である。つまり、「偶然」の連鎖があるのみである。「必然」とは偶然の来歴を敍するもので、確かなのは偶然が偶然を生み出している、そのことである。

〈宇宙生成〉

無から、ビッグバンによって、宇宙が生まれる。すると、その瞬間に無が消失し、有が現れる。有が現れることによって無が意味をもたなくなり、無が消失するということになる。

ビッグバンは偶然であり、偶然の連鎖によって宇宙は拡大していく。このことは、宇宙成長においては、これを実現していくのは偶然のみであることをいう。偶然のビッグバンによって、無が消失するように、偶然はそれ以前のものを無意味にさせ、消失させる。つまり、偶然の連鎖は、偶然に生じた現在性のみが、事実であることを示す。

宇宙は、しかし、単に成長を無限につづけるわけではない。爆発・拡散・収縮というダイナミズムによる成長は永遠ではない。宇宙もまた、偶然によって、その反対イメージへと、突然、一挙に消失させられる。それは「凍結」というイメージである。これからは〈イメージ〉という言葉でしか、論理的には表せないだろう。

この「凍結」は瞬間を凍結するのであるから、動的な一切はイメージにとじこめられ、動的な要因は一挙に消失する。凍結したイメージのまま、宇宙は消失するのである。

この凍結は永遠につづく。

存在はつねに永遠にあるということは正しい。けれども、偶然がこの永遠を終了させるのである。永遠は偶然によって、事故的に終了させられる。

永遠の凍結は、まず永遠であることによって、永遠という尺度、永続するという現認を持つことが不可能であり、それ故、永遠ではない。つまり、一気にその全生涯を果たす。次に、偶然によって永遠が跡絶える。

偶然が生ずることで、凍結の反対イメージ、溶融が生ずる。

溶融はまた爆発、収縮、拡散でもある。しかし、これは「成長」ではなく、否定あるいは消失の連鎖としての爆発、収縮、拡散である。この生涯もまた偶然によって跡絶える。

次に来るのは無である。

この無は初めの無と同一であるか、別の無であるかは分らない。

ただ、次の偶然のビッグバンを待つ、永遠の無である。

（偶然）

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

偶然は「全智全能」である

偶然はその出現によって存在のすべてを「消失」させ、存在のすべてを全き新たに出現させる

「消失」は「無」さえも消失させる（これは、「有」が出現することは「無」を「消失」させる

ということであることと〈関係〉しているか？）

（まず、偶然にも）

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

まず、偶然にも始まりが生じた。始まりはそれまでの無を消失させた。また、始まりは偶然にも暗黒であった。暗黒は光との対比であるから、実はこれは一瞬間だけ絶対暗黒である。つまり、偶然に生じたヘリウムと水素が出会う瞬間のことである。また、さらに偶然にもビッグバンが生じ、絶対暗黒を消失させ、光を包含した暗黒が生じた。ここに偶然にも宇宙が出現することになる。

偶（たまたま）、神が生じた。神が生ずるのに理由も必然性もなかった。だから偶なのである。またそれ以前には何もなかった。ただ単に、何もないというところから神が偶然に出現したのである。

この神は宇宙と言い換えても、その偶然が有を生み、無を消失させる構造に変りがない。

有が生まれるには無は必然であるが、無にとっては有は偶然である。また有にとっては、その誕生によって、無は消失するから、無についての論及は無意味である。であるから有にとって無が必然であるということも有の説明にはならない。有は既に無の概念なくして有である。

（始まりに）

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

始まりに始まりの命名はない
ただ在るものは無

（無から）

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

無から偶然にも力が生じる
そのとき無は一挙に消失する
力から偶然にも空が生じ、空から偶然にもヘリウムと水素が生じる。つまり物質が生じる
空は消失を始めるが、空の力が物質の力と均衡する

物質の始まりである水素とヘリウムは偶然にもビッグバンを生じ、このとき暗黒の中で光が偶然にも生じ、偶然にも宇宙が生じる

無―（消失）――→力
→空（消失）……空の欠落した力
→有
→物質
→暗黒
ビッグバン
宇宙膨張
→凍結
→溶融
→次の無

概念的には

［無］→［力［空→［物質［暗黒［宇宙］］］］］

宇宙は閉じている

無の消失

「偶然の連鎖と消失」シリーズ

○無の概念、抽象化の方法としての記号。
○力の誕生が無を消失させる。
○この力は空の力である（空の力をへこませる関係で有の力が膨張していく。これが物質の誕生であり、空の消失であるが、この有の力が増大することで、消失した空の力が力の概念性のまま「結晶化」していく。空の力の晶化というイメージ）。
○光以前のイメージであるから、色はない。しかし、色をイメージの物質として、材料として利用する。

ここでは色は色ではない。色は無の消失にとって、力のイメージ。また線は空の誕生を示す。

○さらに象徴的イメージ断片は空の晶化を示すことになる。

永遠なんて
偶然にとっては
ほんの一瞬（ひとまたぎ）

diffused reflection

—

カットグラスに映る
魂の横顔

粒子が互いに寄り添うと
誤差の論理で
美しい立体が迫り出してくる

ii

魂の向うを見ようとする
正確な視線
厳格な図法（パースペクト）
カードを配る男が華奢な指の根元で
ルビーの指環を廻す

iii

空の高みから
石英や水晶、方解石の切片が
七色の燦きを発して
雪のように舞い降りてくる

見えない輪郭が
たしかに物質的な光となって
幾何学的に交錯している

iv

土色の家畜の蠢く
灰色を帯びた村の外れで
ひと声高く　狼の咆哮
風に含まれた赤い砂塵が重なる

v

思考の形、思考の色、思考の瞬間と永遠！

はじめてふれる魂、生命、あらゆる運動系

この存在と非在を啄むことなかれ
思考の生み出す一瞬の抽象

vi

赤ワインの溶けだす吃水線を見上げると
夕空を突き抜けていく
純白の鳥の隊列

鉤型の速度を
青い月が直角に貫通する

vii

さし入れれば
向うからも　さし招く
硝子のような絡み合い

水浸しになった思考が
鋭角的な物質を
析出する

viii

都市の蒼い夜の深みで
道筋にひとつきりの街灯
溶け入りそうな

柑橘系の光のイリュージョン

混濁する絵具

光に照らし出された死面（デスマスク）

厳かな黄金に溢れている

（物質は）

物質は他の物質がなければ
存在できない
生命も他の生命がなくては
存在できない
これは貪である

思考は化学的思考と純粋思考がある
つまり肉体的、感覚的な思考は
すべて化学反応である

純粋思考はあらゆるダイナミズムから
解放されている

（直線、矩形は）

直線、矩形は
人間のみが生成した抽象
つまり、存在していないもの
逆にいうと
人間の存在の意味という抽象性を示すことになるやも

「唯一無二」が存在の根源であるとすれば
人工性、つまり直線、幾何、数学などは
儚き一瞬の光芒ともいえる

それゆえに　全体性になりえぬとしても
瞬間の唯一無二かもしれない

絵画が直線の枠で示されているのは
人工性を示しているのに他ならぬ

もの（存在）が

もの（存在）が光の多様性を開示している
光は何もない幼児である
存在が光の成長を促している
接触点から、光の粒子の結びつきを生み出して

（地下室といえども）

——2003.6.6　初めての個展で

地下室といえども暗い場所ではない
むしろ　光り輝く宝石の埋まる場所
音楽でさえ
鉱物の発する　コズミックな諧調

その純白の壁に背を凭せ
何処にもないものだ　と
去りゆく老爺の声を励みに

また色の滲出法について
考えてみる

この部屋の天井には
自然光を擬した照明と
人工的な光の蛍光灯が混じりあって
いくつもの光点からの光を
壁に発している

その光の落とすいくつもの影の中にある
実体はいずれか？
浮かび上がるはずの照り返しと
深い翳りの境界を探してみるが
はたして　実体を探すことに

意味があるのか……

だが　デッサンをつづけていくかぎり
影から実体を手繰り寄せることを
想いいだいているに違いない
ああ、はかない人間の空想！

部屋の壁に凭れている
自分の存在が
乱反射する光と
そのおぼろな影の中に
いつのまにか消失しているのに
いつ　気づくのだろうか

（白昼の光線が）

——2003.6.5　初めての個展で

白昼の光線が窓から飛び込む
いや　光線に向かって疾り出す
おのれの翳

その壁にはいくつもの額が吊られ
額縁の中には
いくつもの水彩画が
確乎とした断片を誇示している

ああ！　すべてと等しき、ありとある断片的存在よ

光線は流れているのではない
光線は押し出され、衝き動かされ
ものとものとをすり抜ける
そして、宇宙は変わる

壁の高みの、はじまりを描いた
小さな絵が
光の影を用いて
光よりも明るい、その誕生を始めている
紺色の奥深い、吸い込まれるような
闇に向かって

（境界のない絵）

——2003.9　二度目の個展前後

境界のない絵を描こうとして考える
ひとつは、物質と物質の間に果たして境界があるのかということ。
もうひとつ、作品は境界によって囲まれているが、これは作品が世界を切り取ってできる断片ということではなく、位相が異なった場所から覗いているから、境界めいたものがあるような按配になっているだけで、実はこれは境界ではない。
つまり、位相と位相の間にはたして境界があるのかということである。
ここにきて、では境界とは何であるかという問題が浮上してくる。
境界とは区別する／せざるをえないときに出現するものだが、そのときこちら側とあちら側は

区別されているのだろうか。
物質が永遠にその外殻を壊しながら「区別」の内部へと辿る、その先の結論は、空であり、無であるとすると、その区別、すなわち境界は無へと向かう道筋を作っていることになる。
つまり、境界、あるいは枠は、こちらとあちらを行き来する通廊なのである。
その通廊はあちらともこちらともつかない、曖昧に混淆した「両存在」とでもいうべきものなのだ。
そうすると、あらゆる独自存在は、あらゆる全体と一気に結合する宇宙包含とでもいうべきエネルギーをもっていることになる。
独自存在は核融合反応のように、境界を貫通することができるわけである。

作品「Hybrid construction」のそれぞれの宇宙軸に附するべき注釈

T1: Omnipresent time 左下、紺色の、遍在する時間

T2: Stagnated time 右中、青い、とどこおる時間

T3: Curved time 左上、黄色のかかった、彎曲する時間

S1: Increased space 右下、ピンクの、増殖する空間

S2: Reverse space 右上、オレンジの、反転する空間

S3: Plural space 左中、金色と赤の、多元的な空間

(space: 構造宇宙)

・物理構造
　空間
　時間
・意識構造　ＤＮＡから神、etc.
・思考構造
　存在は構造のハイブリッド
　構造はネットワークがあり、アクセス可
・範囲の内側（下部）
　内側からは外側は了解不能

・範囲の外側（上部）

外側からは内側は必然

思考は構造を超えてアクセス可能

○ＤＮＡ、意識は反応であり、あったもの

○思考はないものを造ること

スーパーシンクレティズム

断片と統合の階層構造
階層的融合の繰り返し
独自意識（あるいは思考）の立ち上がり
造物主と神（あるいは宇宙）は別次元
第一原因は第二原因の父である

（単純明快なものは）

単純明快なものは　世界の受容であるから
ものを生み出す創造力を
欠落させている

（自由とは何かの考察）

○受身の現実

すでにあるものの反応

縮小、幼児化……

○思考は蓄積する（単一の個人ではなく）

あるまとまり、宇宙構造、影響を与える範囲で

○影響を与える範囲

下部の構造

同レベルの構造

上位の予測されるレベルまで

（自由とは何かの考察）

構造体のカレントでは、外側の向こうも　内側の向こうも推測、希望、妄想はできるが、認識はできない。また論理は認識ではない。

上部は下部に含まれ、下部は上部に含まれる。つまり、見方の問題である。どちらからどちらへ、と。

（自由とは何かの考察）

私は私に属しているものを知ることはできない。また、私が属しているとされるものが私を知ることはできない。さらに、私が私を属しているとするものを推測することができるが、本当は知ることはできない。

私がこれらを知ることができるとすれば、それはファシズムということであり、私自身の自由からも、あらゆる存在の自由という問題からも遠く隔てられてしまうということである。

「自由とは何か」冒頭のための草稿

存在とはノードである。

また、自由である存在とは、属するものを支配することはなく、属することを拒否することであり、つまるところ、すべてを認めながら、すべてを否定するということであり、存在そのも

のが自由な存在であるという絶体存在をを直観することである。

なぜ、属するものを知ることができないかというと、属するものの表面というものの認知は、属するものの構造の連鎖を閉ざして私に開示するからであり、私は私の肉体と意識、精神につながる機能の表層を属するものから得ているに過ぎないからである。

属するものの表層の機能とは、属するものの側からは私が属するものに認知されている私の表層（下部から見た裏内部の）を機能として、つまり属するものの側の構造を結果させる機能として、それを得ているのである。

この構造は、私を属するものの場合にもあてはまる。

そして、構造の上位と下位の関係は本来的なヒエラルヒーをもつものではなく、認知あるいは推察する側の構造から主体的に取り決められる。また、そのベクトルも同じように主体のあり方で取り決められる。

つまり、hybrid な構造、方向と拡がり、多軸の階層が交錯しているわけである。

（自由とは何かの考察）

肉も自ら独立した構造体であるので、意識と身体を持ち、独立した思考と、自己実現をする。
手は手の実現を、足は足の実現を、だ。
そもそも、細胞もＤＮＡも、さらにアトミックな存在も、すべてその意識と身体を持ち、自己実現をする存在のノードである。
人間存在というノードは、これらを構造の内に入れているが、これらを機能として取り込んでいるが、支配しているわけではない。

（諸システム）

生命システム、ガイア的システム、物質的システム、霊的システム、神的システム、宇宙システムで共通しているのは、犠牲、収斂、全体化へ向かうベクトルであり、全体化をその終局目的にしていることである。この到達すべきが永遠であるならば、収斂の連続運動は自己犠牲の美わしき夢物語となるやも知れぬが、あにはからんや、このベクトルは有限である。

つまり、この連続運動は無限ではないのだから、到達した時点あるいは到達以前に無限の闇の底に墜落してしまうのである。

消滅。つまり、あらゆる自己犠牲と収奪とのサイクルは意味のないものとなってしまう運命にあるといえる。

物質、非物質にかかわらず、あらゆる運動システムは無限ではないのだから、一瞬にして消滅

する宿命にある。

そしてこの運動に組み込まれざるをえないあらゆる因子は（生命活動も、肉体も、精神的諸活動も、霊的体験、神的啓示、天国での暮らしも、地獄での悲惨さ、異次元宇宙もすべて）無意味なもののための犠牲を求められ、必然化され、たぶらかされている。

身体と肉体

「身体」というとき、ファシズムの匂いがする。
身体とは統制的であり、管理的であり、目的をもった統合の匂いがする。
このことばに異を唱えることのできないものらの何という鈍感。
肉体ということばには、存在の単位そのものを独立させるべき大らかさがあり、つねに抑圧に抗い、自由への道筋を求めるエネルギーが感じられる。

II

解放衝動——モナドを基点に

（存在は）

存在は包含という構造を余儀なくされているかに見える。これはそのようなことを肯定するとか受容するとかをいう立場にあるということではない。
しかしながら存在は包含という現象によって、己れを見出すことを許されずにいる。

解放衝動とは何か。
包含された存在、階層構造に閉じ込められた存在が、己れを全体に、全宇宙に向けて解き放つ衝動。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

存在の単位

体の中にあるあらゆる単位、それらが自己を持つ。
自己を持つということは、自己と自己以外のものを分かつということであるから、その自己以外のものは自己に対して、アプリオリに一存在である。これはまた、自己と自己以外という全体においても同じことで、概念的には全存在という包含を意味する一存在ということになる。
これらの関係は、包含と非包含で構成される構造となっている。
つまり自己は自己以外のものとは、包含される場合と、包含されていないように見えて本質的・実質的には包含されているという場合を、自己の規定として持つのである。
包含という概念は制約概念であるから、当然、反-包含、非-包含、超-包含という自己の論理的可能性を持つ。

そして、自己とは内‐自己という構造も想定され、超‐ミクロ的な包含関係も自己の規定のうちにすでに用意されている。
ここで、包含関係は、単位が細分化可能であるかぎり、無限の包含構造を想定でき、かつ分割不能な単位が概念規定上ありえても、その証明は不可能であるという論理も誤っていないわけであるから、分割不能な「原」単位はありえない。
つまり、オリジンという概念はありえないのである。
存在―無―有という論理はありえても、その基本単位を「原」単位として想定することは無意味なのかもしれない。
そうすると、ここで現れてくるのは循環論である。ミクロとマクロの宇宙論はこうした循環論的把握を否定することはできない。
ただし、一定の範囲をもつ循環論ではなく、無限の方向性をもつ循環、つまりアナロジー的な、スパイラルな、動的ねじれをイメージするほうがわかりやすいかもしれない。
渦なり螺旋を巻いて、存在はミクロとマクロに突き進んでいる。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

単位と包含

閉じ込められている存在のあらゆる単位。単位はつねに包含されているわけであるから、つねにその上位のレベルに規定されている。

これは原生的な疎外とは異なる問題である。なぜなら原生的疎外とは自己の同一層、あるいは同一レベルにおける自己同一化についての問題にすぎないのであり、ここで述べる「単位と包含」は実現できない全体と実現できない細分化についての問題であるからだ。

「実現できない」とはどういうことだろう。それは確定しえない、固定しえない、そしてそれ自体を証だてすることが不可能なものということである。自己の証明の不可能性は逆に、両方向の「実現できない」自己か、同一のものの現れである、ということを示していると考えうることが可能かもしれない。この婉曲な言い方は、断定を単に避けただけのことで、断定に近い

推定を言っているのである。
存在の解放、つまり自由の実現をいうことは、宇宙論と密接に関与していること、宇宙の構造を解き明かすことに拠っていると推定することも同様のことである。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

刻印

私はなぜ刻むのか
私はきっと細胞のように、あるいはリボゾームのように
赤血球のように、白血球のように
あるいは癌細胞のＤＮＡのように
それぞれの存在の叫びを取り上げるために
きっと刻んでいるのだ
刻印される線分のそれぞれが
彼らの抑圧に対する闘いだから

私という肉体が、精神が、意識が
彼らを抑圧している元兇だ
そして　また私も
私を抑圧しているものに対して
自由への闘いを
キャンバスに向かって
刻印しているのである

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

（絵を描くという行為は）

絵を描くという行為は、宇宙論的な体の傾け方をもつことで、肉体も、精神も、意識も、存在の単位の構造全体が自らの闘いを始めるのだといえる。
およそ、生きることも含めて、存在の哀しみというものは、こうした永遠の、非和解的な闘いを生きていくところに本質があるに違いない。
それは創造することであり、ないものを唯一生み出すことで、あらゆる抑圧と闘うことができるのだ。
ないものを求めよ！
あらゆる価値にまどわされるな！
それらはただの一瞬の悪夢に過ぎない。何かと引き換えにしようとしたときに、その悪夢の餌

食にされてしまうのだ。
ただ、つくりだすこと。そこにしか行為の充実はない。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

（明け方から削り始める）

明け方から削り始める。今回の会期中は、毎日、明け方から大作に取り組むことになろう。すでに五分の一は出来上がった。

このところ、絵を「描いて」いるという言い方をしないで、「作っている」と、他人との話で言っていることに気づいている。

たしかに、サンドペーパーとニードルで削り、筆は、絵具を叩きつけ、刺青のように刻線の中に埋め込むために使っている。

あとは乾くのを待ち、次の一枚に同様の作業をする。

また、どのように絵が変化していても、体の奥底から湧き上がるものを信頼して、失敗するなどとは微塵も思わない。

結局、このことなのだ。技術が身についたとか、感性が備わってきたとかいうのではなく、ただ「えいよ！」の覚悟と、出てくるものへの信頼だけが、およそ描くことの神髄なのだ。
そうすると、何が失敗なのか？　何をもって失敗とするのか？
つまり、結果としての作品の成否は本質的な問題ではないのである。あるいは、結果としての作品をも「失敗はありえない」と捻じ伏せてしまう、立ち上がるものがここにあるのだ。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

存在と宇宙論

私の絵は、存在の解放というミクロの問題と、それが解明されるために向かわなければならない宇宙論、つまりマクロの問題に同時に関係している。
同時にということは、包含という構造の問題を指す。
私の存在論的な位置は、つねに宇宙的多次元と量子論的なミクロとの「中間」あるいは相対的な中間にある。
このことは自由の問題でいうと、抑圧と非抑圧を同時に包含しているということになる。
絵は描くという行為と、何ものかを創造するということで成立している。絵の成立以降の美術史を云々する輩もいるが、それは別の問題であり、美術の本質、つまり描くという動的衝動、創造という宇宙論的ダイナミズム、この関係とは別のことである。

美術は、結果、というより社会史的適応物としての中間概念にあるのではない。つまり、美術史的位置付けはこのような創造的スケールからは些細なものなのである。

人間とは何か、自己とは何かを問うことは、ミクロ的な宇宙論とマクロ的な宇宙論、これらを総合する存在論を問うことである。

そして、その問いの源泉にあるものは、自己は自己であるという自由への意志であるに違いない。

２００５年６月「第８回個展」会期中の断片

primitivity：原初性

――ないものを創造することの充足

存在と宇宙を見極めること、見極めねばならぬことに、自己の目的がある。
意味とか価値ではない、死ぬまでに求めてやまぬこと、死んでも死にきれないということを指す。
絵を描くということは、ミクロ的には自己の単位への下降と上昇であり、解放衝動の立ち上がりであり、マクロ的には自己から外へ向かう、属する構造との自由への闘いでもある。
絵を描くということに、この二つの方向を循環させることで、じつは宇宙創造と同等の意味がある。
もちろん、絵具をことばに置き換えてポエジーとしても同じである。

つまり、ポエジーの直観こそ、この創造行為の源泉なのである。
プリミティビティが必要とせられるのは、この純粋行為を取り出す、取り戻すためなのである。

（スクラッチングは）

スクラッチングは、存在の解放衝動
宇宙へのあらゆる存在の刻印行動

あらゆる交換性を切り離す必要がある
なぜなら、それらは支配と権力を示す価値の形態だから
経済とはその総過程である

III

超ひも理論の方へ

（意識、肉体、宇宙）

意識の下へ降りていくこと
肉体の中へ降りていくこと
宇宙とは何かを考えることは
同じことなのだ

意識について考えることは　宇宙と肉体について考えることであり
肉体について考えることは　意識と宇宙について考えることであり
宇宙について考えることは　意識と肉体について考えることである

第９回 “Super-string Theory” 展にて

（折り畳まれた次元）

折り畳まれた次元は偶然の1次元との出会いにおいて捕捉されるが、偶然は実は必然であるか、あるいは無限の偶然の遍在において、あらゆるところに凝縮しているのである。

問題は〝見方〟である。ほとんどは光を閉じ込める1次元、なぜなら初めの時空に光が戻ることは少ないであろうから。

見えざる一点は見えるのである。でなければ何も見えないことになる。人間の視覚は光学現象のごく一端しか捕捉できていない。何も見えてはいないのである。

視覚への依拠を離れることによって、見えざるものを捕捉する視野が広がるわけである。

第9回 “Super-string Theory” 展にて

思考は物理的に存在する

数十億年前の光の中に巨星の爆発する姿を認めえんとすると、その時点の物質の詳細もつぶさに解析する可能性もまた否定しさることはできない。ある巨大建造物の影をその光の中に認めえたとすれば、建造物は人間の思考の結果であることは言を俟たないのであるから、そこからその思考を解析することもまた大いに可能性がある。

そのようなことをつなげて考えてみると、宇宙のダイナミズムとあらゆる思考を物理的に区別することなどできないのではないか。

宇宙もミクロの存在に遡ることができるとすれば、思考も結果を生み出すエネルギーをもつものであるから、物理的存在ではないと断ずることはできないはずである。

第９回 “Super-string Theory” 展にて

（光が折り畳まれ）

作品とスポットライトの間に
ときどき空間が抉られたような
わずかの隙間が斜めに走ることがある
これは文字通り出現するわけであるから
亀裂のたぐいかもしれぬ
光を透過しないのであるから
その影の向こうは存在しないし
亀裂の中は　光が折り畳まれているに
ちがいないのだから

光の面を記憶させて
辷り落ちる
視野から辷り落ちるのか
思考から滑落するのか

展示空間は一枚の巨大な絵と
十数本のスポットライトのほかは
白く塗られた天井と壁
音もなく、何やらの気配もなく
滑り落ちる　この破片たち

平面の作品の2次元の中に
蔵われた　無数の異世界

第9回“Super-string Theory”展にて

作品“Super-string Theory”についてのメモ

１次元対１次元に収斂されるということ。
すべての次元を１次元に折り畳むとすると、基点と全体との対峙となり、包含関係が消失する。
その１次元は多次元を畳み込んでいる。
宇宙と内部存在を求めることは同じことで、これを同時に実現しているのは行為である。
ミクロの宇宙論とマクロの宇宙論という同一の問題を、人間存在は肉体的行為でつなぎとめている。

この肉体的行為という原初性。
ここから、細胞・ＤＮＡから量子論的な電磁気力まで下る存在の基点へと思考をめぐらすこと

ができる。
それは、その地点から立ち上がる解放衝動が何を突き抜けていくのかという問題でもある。
11次元の宇宙論をそこから掴まえられるかということ、１次元 vs. １次元。

生きかつ思考する。
美術とは作品をいうのではなく、この行為に意味がある。
作品が物質的に永遠ではないのだから、したがって作品に向かう技術も現実性も評価さえも意味はないのだし、まして美術作品とは行為の一方法であるから、問題はあらゆるアートの底にある行為と思考をつなぐもの、解放衝動自体にあるといえる。

第９回 “Super-string Theory” 展にて

浮游するオブジェ

巨大な絵（平面）の前で
かすかに廻転する
粘土製の球体の表面で
音楽の波が届いては
反射する

光もまた
波動の形式で
これを擦り抜ける

重力は
全宇宙からここに届くには
あまりに広汎で
かつ　か弱い

球体の廻転を促すのは
確率のスピンであるに違いない

2005.9.26 - 10.1　第10回個展にて

息を吹きかけたとき

奥行きがあるように見えるが、向こうは平坦で、向こうの歴史の光が異なるだけで、つまりは時間の凹凸が色の違いをもたらし、奥行きと見せている。

だが、私の見る奥行きは、私の視覚の反応時間、すなわち脳の反応であるから、内部に距離の構造を作っている。

そこでは、向こうは平坦ではなく、空間を認知しているのである。

だとすれば、「私」から見た場合、奥行きは確かに存在している。つまり、私の内部に奥行きが存在しているということは、宇宙が鏡面であって、内部が実在であるという逆転も考えられる。

そうであれば、まさしくキャンバスという平面は宇宙そのもの、コズミック・ミラーという側面があるのではないか。

平面に平坦な平面を重ねていくという行為はまぎれもなく創成の業、光の創造であるのかもしれない。
すると、描き手の私は、キャンバスの向こうから見たときに、視ることのできない一点、始まりの string の一振動となるのかもしれない。

息を吹きかけたとき、生命は漲る。

2005.9.26 - 10.1 第10回個展にて

（選択的実在というはがれが）

選択的実在というはがれが
幾層ものめくれからこぼれていく
ときには　あまりに緩やかに
あるいは　過激なまでに劇烈に

点よりもわずかばかりに長さのある
そのことが発端であるのか終端であるのか
削除であるのか密封であるのか
隠蔽それとも新たな複合

断じて侵されてはいけない
この手が体が思考が
平面を色彩を刻印を
次々に実在させていく　解放していく

それは　宇宙を磨いているに違いないのだ
鏡のように磨いて
その中に体を入れていく
光の先が閉じるまで

2006.4.24 - 29 第12回個展に寄せて

意識と思考の分離――思考子と思考波

思考は意識による生産の結果という場合もある
意識は構造体であり、環境でもあるが
思考は独立して抽出できる
思考体が意識を機能として使う場合もある
タキオンと純粋思考……

（実在とは）

実在とはエネルギーのことである。
また、そのものから次の「新しい」ものを生じさせることができる場合にはエネルギーが存在する。
つまり、思考は次のあらざるものをあらしめることが可能であるから、エネルギーを持っており、実在している。
意識は肉体に属するに近い、精神機能であり、その所産として思考を発生させられるが、逆に思考が意識を機能させて、思考の活動を生ぜしむることもできる。

時空の枠組みが光速である

光速の限界

光子‐ダークマター（反光子）が遍在している。

ビッグバンによって時‐空の枠組み（多次元）が生成し、それは静止している光子‐反光子宇宙の中に時空エネルギーのかたまりが誕生したということである。

時空エネルギーは光子‐反光子宇宙に充ちる光子―反光子エネルギーと反対方向をもつために、宇宙定数Ｃを超えることはない。

時空エネルギーがアクティヴであるということは、光速Ｃの反速度をもつということに他ならない。

大気の中を音波が走り、音速がマッハを超えないのと同じように、時空の枠組みと光子‐反

光子宇宙の中で光速が上限をもつのはこの理由による。

正確には、光子‐反光子の宇宙（０次元）の内部に生じた時空の枠組み（４次元）の内部では物質の速度（物質のエネルギー）は時空の枠組みの速度（＝光速）を超えることはできない。

時空の枠組みの中では、一般相対性理論は適用される。

（死ぬまでに知りたいことは）

（死ぬまでに知りたいことは）
人間とは何であるか
存在とはどのようなことなのか
宇宙とはどのようになっているのか

現実は思考の中にある（測定・選択）

相対性原理という現実性
時空が歪んでいるという現実性

量子が重ね合わされて存在が選択されるという現実性

思考を実在させる

時代の現実？　ふん、では、時空の歪みという現実、量子の不確定性という現実はどうなるのかね？

（作品について）

広大な影がたち現れる。あるいは遠ざかっていく。
その建物群のような集積する影は歴史そのものであるのか。過去そのものであるのか。私は影の中に蠢くひもを描いてみた。揺れ動く、律動する、沸騰するそれらの環を。
それらは落下するようにも思われるし、永遠にとどまるようにも思われる。しかし、一瞬にして位置と形を変える。
次に記憶の残り香とでもいうような橙色の空間を重ねてみた。水蒸気のように立ち上がる性質をもっているのか、それとも降りつづく疲弊したガス――。重くたちこめる粒子たち。
そのとき、こちらの絵には量子が選択され、向こう側の絵には量子は出現していない。
私は、二枚の絵をひとつに描いている場合の量子と別々の相似するものとしての絵を描いてい

る現実の二枚の絵として、自ら選択しているのか。
光は片方では省略であり、もう一方では光のスリット。
現れた量子の見えざる向こうには、別の次元の空間が映っているのか、閉じこめられているのか、光に反して、光のゆきつく先が思われるのである。

第12回個展で

（作品に取り囲まれるということが）

作品に取り囲まれるということが何をその時間に与えうるのか。
その作品はたしかに自らの生み出したものなのであるが、すでに私の手の届くところには存在していない。それはただ悲しみのうちに充満している過去の音楽というようなものでもなく、知られざる未来の破滅（おお激烈な破滅よ！）ということでもない。ただ瞬間が永遠であるように、永遠が偶然の一瞬であるような、我を失わせしめるごとくの原初の存在。
だが、それは私をそこに誘き入れようとしているのか、それとも私を遠ざけようとしているのか、あるいはそれと私の間隙には遮断された透明な皮膜が漂っているとでもいうのか。私はただ漂っている。意識ばかりではなく肉体そのものがたしかに漂っているのを感じている。
体が、からりと変換するような、そのような極限性を目のあたりにしているのかもしれない。

けれども、その視線は誰のものなのだろう。私はすでにそのような目から失われているのだから、その眼は変換という状況そのものなのではないか。変わりつつあることが変わること自体を知っている——。

私は作品にそのような意味あいで、仕上がりのサインを入れなければならない。

第12回個展で

「宇宙音楽」の事象地平（ビッグクランチ）

僕は mica のように
剥がれ落ちるべきものが好きだ
か細い線、透明な薄片、かすかな光
ある種の記憶のような

僕は mica のように
重なりつづけるものが好きだ
色彩がとどこおり　消えてゆく平面

忘れうべき記憶のように

近づいて裸眼で凝視すべきである
重層するプレパラートに
複雑な罅割れが生じ
僕は閉じ込められる

幾多の異相が　本当は一つであるように
こちらに光があるのか　あちらに光があるのか
物質は存在するのか　しないのか
僕はそのあわいの事象地平（ビッグクランチ）で押しつぶされる

第12回個展にて

恐るべき瞬間の時間サイズ

第14回展「10^{-36}秒」に寄せて

僕らはある日、ミクロの時間についてよく考えてみなければならないのかもしれない。
僕らは時間を、僕らが生きてしまった規模で捉えてしまいがちだが、時間そのものが生きてしまっている規模からすると、それすらも実在感のない小さなサイズである。
けれども、時間そのものの量と物質の出現という関係から見ると、僕らの感覚する時間はあまりに大雑把で、巨大すぎる。
僕らは時間について考えてみるとき、時間の方向と量のベクトルを離れて、無限点になりえない瞬間というミクロの時間サイズを取り出してみる必要があるのかもしれない。
宇宙のすべてを一点に結合させていたエネルギーが分岐するこの時点の時間量が、ここから始

まる宇宙の全時間量を包含しているのだとすれば、この恐るべき瞬間の時間サイズこそ、思考という物質の素因のひとつとして、ついには匿されている時間次元の実体を示すことに……。

「ある日、ミクロの時間を……」改題

無限点について

物質（エネルギー）が無限点になりえないということは、思考すら実在していなければならないということだ。なぜなら、実在が存在論の起点だからだ。

また、思考の実在が物質の実在を保証しているということが考えられる。

次元は実在しているかどうかはわからない。これは見る側の視点であって、見方の問題であるからだ。

次元は外側、つまり包括的な視座があるとして、ここから見るときは超‐単純化された次元（０次元、あるいは１次元）であろうし、構造の内側から見るときは構造の入れ子の数に比例して超‐複雑化された次元になっていくであろう。これは、天動説と地動説の問題である。

時間も次元であるから、その大小は相対的である。否、超‐相対的であるといえる。

ということは、方向性も「無限にあり無限にない」、つまり実在していない可能性もある。
だから、これらの問題はただに存在が実在しているか否かということにつきるのかもしれない。

実在というプランク・サイズ

光速度がゼロであって、次元の塊がマイナス方向に移動していると考えることはできないだろうか。

次元の塊は光の実在する範囲にしか実在できない「見方」ともいえる。また、光そのものが実在の範囲であるということ。この塊が物質であるのかもしれない。

さらに、物質とは実在、つまり光の存在（物質＝エネルギーの存在）を示すのだから、実在の範囲の外は実在についての論及の対象外（ありえない範囲）ということになる。

このように、物質を「見方」によっては次元の塊であるとすれば、この塊（単位量）は、静止した光の容れ物という範疇で次元に分解された塊分のエネルギーを持つ。この塊のサイズは光

の粒子より細分化できないから、光を擦り抜けることはできない。つまり、光粒子の壁にぶち当たる。

タマネギ理論

包含‐被包含の連鎖の構造を、タマネギの皮をドーナツ状に重ね、さらに中心がなく、またこの構造の外側がない状態としてイメージすると、極小と極大、量子と宇宙との連なりを思い浮かべることができる。

つまり、極大が極小を包含し、ついには極小が極大を包含する、また宇宙が量子を包含し、ついには量子が宇宙を包含するという、ある種循環論じみた考えである。

ここでわかることは、中心点がないので、論理的なゼロ点を設定する必要がなく、被包含の実体の実在がつねに示されるということであり、タマネギの外側がないので、実在は大小にかかわらずこのタマネギの適用範囲に限定できるということである。

また、極小が極大を包含するということは、超ひも理論のカラビ‐ヤウ空間におけるフロップ

転移をイメージできるかもしれない（引き裂かれたカラビ‐ヤウ空間に新たなカラビ‐ヤウ空間が作り出される。カラビ‐ヤウ空間とは、ひも理論の示す新たな空間次元の幾何学図形）。量子論が量子的サイズのビッグバンの問題を包含し、ビッグバンの問題がその後の１３０億年の宇宙の極大を包含する、ということである。

ここでは、空間のサイズ、時間のサイズはスケールの問題であり、スケールは「見方」の問題であるから、スケールはついには「実在するかしないか」という目盛りに集約され、サイズも「あるかないか」の「ある」に示される極小サイズに集約される。つまり、プランク長（1.616×10^{-35}m）といわれるものである。

次元のかたまり 1

多次元は「n 次元, [（n － 1）次元..1 次元］次元」という 2 次元でイメージできる。または、「n 次元, （n － 1）次元, [（n － 2）次元..1 次元］次元」という 3 次元イメージで考えられる。日常世界では 3 次元までのイメージしか具体性を喚起しないので、この 2 次元イメージと 3 次元イメージで高次元の座標を示すことになる。

「[（n － 1）次元..1 次元］次元」、「[（n － 2）次元..1 次元］次元」はそれぞれ多次元を 1 次元のかたまりとして表現したものである。

「n 次元, [（n － 1）次元..1 次元］次元」は 2 次元座標であり、「n 次元, （n － 1）次元, [（n － 2）次元..1 次元］次元」は 3 次元座標ということになる。

つまり多次元は、方向性を持たないあるかたまりと、ある方向を持つ線的かたまりとに押し込

めることができる。

総合的にみると、すべての次元は次元のかたまりとみることが可能である。

また、さらにつきつめて、1 次元座標系というものを想定すると、すべての次元は 1 次元の線のかたまりになり、この方向のサイズをゼロに近づけるとゼロではないかたまりとなり、座標のスケールそのものをゼロに近いスケールに縮めると、あらゆる次元を示す範囲が単一のかたまりとして示され、次元という分解能（見方）と次元自体がそれぞれ、物質と同じようなかたまりの性質を持つのではないかと思わせられる。

次元のかたまり 2

次元とは何であるか。1 次元、2 次元、3 次元の空間次元という日常次元は存在しているのか、また 4 次元の時間次元は存在しているのか、さらに高次の多次元も存在しているのか、ということである。

そもそも次元とはスケールの持ち方であり、物質というかたまりを、視点のそれぞれのレベルにおける「見方」というスケールで分解しているのではないか。あるいは、ある位置レベルにおける物質に対する分解能といえるかもしれない。

つまり、「見方」が物質というかたまりを次元に分解しているということである。

また、次元の数はこの分解能に依拠しているのではないか。

この物質のかたまりに対する見方は（複数次元は)、日常世界におけるイメージでは、1 次元座

標、2 次元座標、3 次元座標に置き換えて考えることができる。

そのうち 2 次元座標系（x, y）においては、3 次元空間では 2 次元までを「線」として x 軸に定義し（y 軸は高さ）、4 次元空間では 3 次元までを「平面」として x 軸に定義し（y 軸は時間）、5 次元空間では 4 次元までを「空間」として x 軸に定義し（y 軸は 5 次元）、6 次元空間では 5 次元までを「時空」として x 軸に定義し（y 軸は 6 次元）、7 次元空間では 6 次元までを「5 次元空間」として x 軸に定義し（y 軸は 7 次元）……というようにレベルダウンして置き換えて示すことができる。

これは x 軸を「n － 1」次元までのかたまりとみなしているわけである。つまり、「[0..n － 1] 次元, n 次元」という 2 次元座標系である。

（同様に、3 次元座標系（x, y, z）においては、4 次元空間では 2 次元までを「平面」として x 軸に定義し（y 軸は高さ、z 軸は時間）、5 次元空間では 3 次元までを「空間」として x 軸に定義し（y 軸は時間、z 軸は 5 次元）、6 次元空間では 4 次元までを「時空」として x 軸に定義し（y 軸は 5 次元、z 軸は 6 次元）……というようにレベルダウンして置き換えて示すことができ、これは x 軸を「n － 2」次元までのかたまりとみなしていることになる。）

また、2 次元座標系で 1 次元世界を扱う場合、「[0..（1 － 1）]次元, 1 次元」、つまり「0 次元, 1 次元」となり、x 軸は 0 という点だが、この場合でも y 軸はスケールとして大きさをもち、またそのサイズは y 軸上で 0 に近似した大きさの有限の点と考えることができるのではないか。
（0 次元世界は「[0..（0 － 1）] 次元, 0 次元」となり、「[0..－1] 次元, 0 次元」という実在しない次元をもつ座標軸が示されるが、これについては x 軸にマイナスサイズの大きさをもつということになるのかもしれない。）
このようなことを考えると、改めて、極小は 0 ではなく、有限のサイズであるという、プランク長さを想起させられるのである。
また、極大の次元は「[0..∞ － 1] 次元, ∞次元」となり、x 軸はここでも有限を示している。
極大、極小のサイズの大きさについても、そのスケールはやはり「見方」の問題であるから、概念上、同等のサイズと見なすことが可能である。
つまり、有限の極小と有限の極大は、実在のサイズとして同等であると考えられるのではないかということである。
存在は（宇宙は)、「見方の問題」として多次元に分解できるのではないかということ、また、

そのそれぞれの次元のサイズはついには極小のサイズとして見なすことができるのできないかということ。
そして、このサイズこそがプランク・サイズ、つまり無ではない、実在としての存在＝物質のサイズであるということなのかもしれない。

意味と絶対的外部客観

あらゆる実在に意味を求めるということは、外部からの規定、つまり外部的客観からの定義を受けるということである。

包含‐被包含の無限連鎖が構造として宇宙を貫いているとすると、この外部的客観は、外部のさらに外部に客観を措定せざるをえないという矛盾の無限連鎖に至るため、ついには絶対的な客観を措定せざるをえなくなる。つまり、神的絶対性の措定である。

しかし、この神的世界観は単に論理的破綻を呈したということに過ぎない。超越的な外部を、永遠の静的な外部を想定しているに他ならないからだ。

超越的で絶対的な外部は、ここでも、自らに外部を持ちえないという矛盾に晒されている。

つまり、実在の有限性に対して、絶対的な外部は無限であることによって非実在という範疇を

作ってしまうからだ。ここでは、絶対的な客観は実在しないという矛盾をも呈することになる。

「意味」を付与するということは、このような神への帰依、信仰から生じているわけで、結局は実在を否定するということになる。

神霊的な世界観というものは、あらゆるものに意味づけするところから始まるようだ。

あらゆるものに意味がないと断ずれば、すべての呪縛から解き放たれる。

重ね合わされた次元

包含‐被包含の構造を、芯のない、外部のない、タマネギの皮のドーナツ状の連なりとするとき、極小と極大の、物質の構造とユニバースの構造の、つまり量子論的な宇宙と相対性理論的な宇宙との関係をイメージできるのではないか。

要するに、「次元の分解」は、このタマネギの皮の層の「見方の問題」であり、グラビトン（重力子）が重力に関係することと次元の歪みが重力に関係することが同一のことであり、包含‐被包含の方向が逆転しているという見方も「見方の問題」であり、物質が一個のかたまりであるとしても、多次元の極大の宇宙であるとしても、これも同一のことであり、超ひもで緊めつけられたプランク・サイズの多次元宇宙が内部からは極大に広がっているということと同等であるということもいえるのではないだろうか。

I氏への書簡1

前略

先日はわざわざお越しいただきありがとうございます。
また、片づけを手伝わせるなど失礼いたしました。

喫茶店での話はとても楽しかったです。多次元論やひも理論をまともに話せる美術家にはなかなかお目にかかれないので、いささかストレスも解消できたしだいです。
さて、お礼かたがた、「思考を物質として考える」ということについて補足してみます。

人間存在の単位（かたまり）としての身体は統制機構であり、これは肉体と意識を統制している。

この身体というレベルは、包含‐被包含の関係でいうと、包含することでこの構造体を統御している。「抑圧」と言い換えることもできる。

身体の下層にある肉体と意識はそれぞれ複数の単位あるいは部位を階層的、並列的にもっており、それらはそれぞれ独自のありようをしており、身体の管理機構の内部で上位の階層から抑圧されているわけで、つねにその状態において重層的に自由を奪われている（私の原理的アナーキズム発想ですが、このことからも、「身体」ということばの持つ官僚的な臭いが好きになれません）。

このようにして、肉体は、細胞（異性物の合成物でもある）、さらにＤＮＡなどの下層にひたすら下り続け、意識は多重化、下意識などへと深化し続ける（生命‐生物系構造体）。

さて、ここで、肉体や意識はそれぞれの下位の単位ごとに独自存在としての「かたまり」でもあるのだが、人間という「かたまり」のレベルでは身体に帰属し、身体が消滅するとそれ自体も失われることになる。閉じ込められた生命系のかたまりは、人間レベルでは身体の機能とい

う属性を与えられているわけだ。

「思考」の話に転じると、まず、脳という身体部位が消滅すると「意識」という身体機能は失われる、というところがミソである。「意識」はそもそも、特に脳味噌における化学反応の発展的機能として、生命系の知的機能の累積概念として考えられる。

ここで、「思考」は意識によって生成された結果と考えてみる。「思考する」という動詞は意識の動作と「思考」という名詞形との中間にあるような気もするが、ここではとりあえず触れない。

さて、成果物としての「思考」は、これを生み出した意識や身体が消滅しても存在するのではないかというのが「思考子」論の眼目である。

たとえば、ピラミッドという建造物は謎に満ちているが、人間の思考の形象化であると考えることができる。稜線に見られる直線性だけでも、そのことに抽象された「思考」のかたまりを感得できるはずである。

またそのようにして、絵画にしても、文学にしても、文明の形跡は、かかわった人間が消滅しても（文明自体がなくなった場合も）、「思考」の形として、物質として存在しているわけだ。

その建造物が崩壊し、砂粒になったとしても、その砂粒の存在にそれまでのすべての「思考」が断片化されているのか、あるいはすべてであるのか、とにかく物質としてかたまりとして実在している。

さらに、この「思考」は実在しているだけでなく、次の実在を突き動かす可能性も秘めてもいる（ある「知」の系列があるとして、これと反応するなどで、新たな「思考」を創造する原因になるなどのこと。「思考」が「思考」を創造する、つまり実在を示す「エネルギー」をもっていることを述べている）。

このようなことから、思考を意識から分離させ、抽出して、独自存在（単位、かたまり）として実在させられないかと考えるのである。

（意識―精神―神霊的世界という流れは実在論とは別の問題のようなので、とりあえずは触れない。しかし、「あってもかまわないが、実在に影響を与えるようなエネルギーはない」とも考えている。）

この「思考」という物質が光子と類似しているのではないかというアイデアが次に続くわけで

す。

量子論の不確定性理論における測定者（器）という視点、波動論と粒子論の重なり、次元はつまるところ数学的仮定（ユークリッド的な仮想的直線性）という分析能（見る者の位相レベルにおける解析能）ではないかなど、これらは「見方の問題」として考えることができるのではないか。そして、この「見方」こそ「思考」そのものではないか。

さらに一歩踏み込むんでいくと、この「見方」自体がそもそも物質を作っているのではないか、この「見方」が測定者の位置（位相）での分析能という「思考」を意味しており、ひも理論が多次元を締めつけることで物質（宇宙）を作っていることと関係しているのではないか、と妄想はつきないわけです。

次元を分解する能力、つまり物質を解析する見方＝「思考」が物質の原因あるいは密接に関係するものではないか、という飛躍です。

ちょっととりとめのない文章になってきたのでここでやめますが、要は「思考子」という、光子と同様のエネルギーを持つ物質を考えてみたのでした。

（以下、略）

九拝

思考と意識

意識は身体に帰属している。身体は機構であると考えると、身体は肉体と意識というそれぞれのノードをもち、肉体と意識は身体の機能として帰属させられているとみることができる。だが、思考は意識と関連してはいるが、その生成物としてみることで、意識あるいは身体から切り離すことはできないだろうか。

医学あるいは脳科学によって示されるところをみると、身体の機能はいっそうロボット化し（代替可能）、さらには脳における生物的化学反応あるいは機能さえも肉体（生物 - 生命活動）と切り離され、ついには意識活動がロボット化された身体によって実現され、肉体のない意識が存在するという可能性がある。

このことは、意識が生物 - 生命活動に絶対的に依存しているのではなく、（生物 - 生命活動から

切り離された）機構としての身体に依存していることを示している（それゆえ、意識が身体とは独立した存在だとするのは、結局、身体機構のない状態の意識を持ち出すことになり、心、精神、霊などから神秘主義的あるいは宗教的世界観にゆきつき、それは絶対的な外部客観を措定せざるをえない無限論の矛盾をもたらすため、実在論が適用できないことから、ここでは除外する）。

意識は肉体であろうが、ロボットであろうが、その機能が帰属する機構がなければ存在できない。

だが、たしかにその生成物である思考自体は、意識と運命を共にするのだろうか。思考は身体とも意識とも分離された独自の存在と考えることはできないのだろうか。

意識は身体を離れては存在できない。

思考は意識を離れて存在できる。だが、そのためには、思考は物質でなければならない。

身体とは身体レベルであって、包含‐被包含の連鎖構造であるから、食物連鎖と同様の抑圧と自由の構造（システム）に収斂される。それゆえ、意識もそのような上位レベルに支配されて

いる。

思考はそれぞれの結果なので、つねに独自の存在として、宇宙と等しい規模をもつかたまりとして考えられないか。そのためには、思考は物質としてのエネルギーを持たねばならない。

１３７億年前のビッグバンのことを考えることができるのだから。

１３７億光年の宇宙の果てのことを考えることができるのだから。

思考は、宇宙で最高速の光と同じか、それを凌駕して光のゆきつく先のことをも考えることができるのだから。

思考と「見方の問題」

意識は身体に属する機能であると思われるが、精神、魂などというものも、それらのありように近似しているようだ。

精神、魂は実在とは無縁のようだが、思考は身体、意識と切り離された独自存在であると考えることはできないだろうか。

つまり、思考は生命系の活動と切り離される実在であるかもしれない。

また、思考は「見方の問題」自体であるのではないかとも思えるが、この点も重要である。

なぜなら、量子論における量子の選択性つまり不確定性は、測定器（「見方の問題」）という非生命系存在によって決定されるということから、そもそも「見方の問題」は生命系に依拠する必要はないからである。

とすると、非生命系も思考を発生させることが可能であるということにならないだろうか。
また、このようなことから、思考は意識が消滅しても存在するという可能性はないだろうか。
この測定器は測定することによって「見方」を生成する。
この「見方」こそ思考そのものであるとすると、思考は意識とは独立して実在するといえる。
並行宇宙論によると、「見方」が並行世界の生成因であるならば、思考は物質としての世界の生成因であるとも考えられる。
身体という「機能の統合体」は生命活動の統制システムであり、脳レベルの機能と密接に関係する意識もこれに帰属しており、この統合体が消滅すると意識機能も消滅する。機能しなくなる。
しかし、思考は機能ではないから、生成物として実在したままである。
このことは、測定器という物質が「見方」を生成するということから、またその「見方」が「あるひとつの世界」を選択し、展開していくということから証されるのではないだろうか。

次元を折り畳む

折り畳むということは、スライスしてクランチすることになるのだろうか。
つまり、1次元ではあるサイズで丸めて折り畳んでこれをめり込ませ、2次元では1次元ごとにスライスしたものを2次元座標上で押しつぶしていく。……
このとき、重なった次元の折り込まれた部分は圧縮されながらも実在している。
多次元でも同様に、次元の数だけ、あるサイズにスライスされた次元がそれぞれ押しつぶされ、次元空間にめり込みながら圧縮されていく。
さらに、この座標点がサイズの存在する方向に、次々に重なり、押しつぶされていく。
重ねるたびに押しつぶされるので、エネルギーは加重されていく。このエネルギーを閉じ込めるのが「ひも」という概念になるのかもしれない。

だから、ひもは極小を締めつけるエネルギーから極大を束ねるエネルギーまで持っていることになる。

カラビ‐ヤウ図形とは、このスライス‐クランチを数学的に表したものであるような気がする。

また、忘れてはならないのは、このとき座標点は始点からサイズ方向にプランク・サイズ分移動していくということである。

もしかすると、プランク・サイズの次元の重なりにあらゆるサイズが呑み込まれていくということを示しているのかもしれない。

フロップ転移の時点でも、転換のタイミング自体のサイズもゼロではなく、ゼロの近傍なのではないだろうか。

「無」というありえない地点のすぐ近くを極小という実在がぐるぐる回っているのをイメージすることができる。つまり、ドーナツのように、実在のひもでできた空洞の周りをひもが締めつけているのである。

このとき、ひもが締めつけてできた空洞は「無という実在」ではなく、ひもの「有サイズ」から生まれる隙間、「ずれ」であるのかもしれない。

Ｉ氏への書簡２

前略

（略）

さて、ピラミッドの話は例が悪かったようです。話をわかりやすくしようと思い、かえって混乱を招いてしまった。

ピラミッドには思考の形象化がなされ、思考の内容は一時的には反映されるでしょうが、すぐにピラミッド自体も消滅し、その破片もさらにくずおれていくばかりです。

私も、極小の断片になった構築物の物質量子においても、それを生み出した過程に発生した思

考子においても、思考の構造的な内容は失われると考えています（ブラックホールに吸収された物質のすべての情報の復元という論議などからは、断片としての「知」というものは考えられるかもしれない？）。

思考子は単なるエネルギーである。
意味も価値もア・プリオリには存在しない宇宙においては（今のところは「人間原理」の方には傾かないようにしています）、思考の内容はエネルギー準位を上げる役目をしているのかもしれない。複雑であればあるほど「ゆらぎ」が大きくなる、あるいは単純でも強ければ波長は短くなる、などのように。
思考子は漂っている、光と同じように。いや、少なくとも光速に近しい速度で漂っている（相対性理論に反して、私は光速以上の可能性を考えているが）。
ひも理論によると、閉じ込められた物質（光）が量子的な空間の中で裂け目をつくり新しい位相変移によって物質（宇宙）を再構築（再生産？）する（裂け目から空間をがらりとひっくり

返して！）フロップ転移ということが考えられているようだが、これと同様に、思考子というエネルギーのかたまり（量子）は、位相の変移によって宇宙をひっくり返し、新たな宇宙を作るということがあるのかもしれない。

思考は日常世界的な成果物（建造物、芸術……）を生み出すが、それは結果であって、本質的な問題は、思考する過程で生まれる「思考」そのものが、思考子というエネルギーのかたまりを発生していくということにある。

思考のどのような成果物自体も「剛体」ではなく、あるレベルにおける物質の量子的なかたまりであるから、形象としての成果物も宇宙レベルでは一瞬の有限性であることに変わりはないし、物質のプロセス（宇宙過程）において、その思考内容が情報としてまとまりがあるとも思われない。最終的には、ブラックホールを通じた位相変移を経て、次のビッグバンにつながるだけのことなのだろう。

思考の構造体は極小に断片化され、宇宙に四散したフラグメントからはそうした情報を統合することさえも不可能に違いない。

そうすると、無数のフラグメントが思考子として宇宙に拡散するということは、思考も成果物

もともにエネルギーとして物質と宇宙に関係するということになるのではないか。
先のフロップ転移やブラックホールに関連づけると、思考は思考子を経て量子的な宇宙を生成する場合と、宇宙過程を経た次のビッグバンによって宇宙を生成する場合がある。
つまり、量子に畳み込まれた多次元空間によるフロップ転移あるいはコニフォールド転移（カラビ‐ヤウ空間における裂け目から生ずる転移）による空間の生成というプロセスと、「ビッグバン→宇宙生成→ブラックホール→転位」というプロセスである。
（後者はどんな文明も文化も跡形もなく消滅し、宇宙の藻屑になるということを言っているのであり、前者はまず物質生成のエネルギーと関係すること、そこから宇宙の生成につなげている。次元空間において時間と空間のサイズがないというアイデアを仮定すると、この両者は本質的に同一のことかもしれないが）。
このことは、思考を生成する生命系に「意味」をもたせるということではなく、生命系も他の物質と同じように、宇宙プロセス（＝物質過程）にあるということである。
だから、問題は、思考によってエネルギー物質としての思考子が生まれるという点にある。
これは、思考子が形象化されたものに移動するということではなく、またそれによって別の思

考が次のものを生成するということでもない（それは生命系の存在範囲では起こりうるかもしれないが）。（以前までは、たしかに、思考の移動と再生、展開というようなことを考えていました。本当のところは、このあたりはまだどっちつかずかもしれません。）

何を思考したのかということは、その情報の構造体が適用されうる範囲（時空間的）が存在している限りにおいての問題に過ぎないのだが、ここで問題にしているのは生成されたエネルギーの強さである。適用されうる範囲での価値や意味は時空的にもせいぜい局所的なものと思われる。

エネルギーのかたまりが、次の物質、つまり宇宙を作るのである。

別のアイデアがあります（いろいろな考えが輻輳しているのです）。

先に、時間と空間の次元サイズがない場合について触れましたが、そうするとひとつのかたまりにすべての情報が含まれるというケースを考えることができます。ひも物質が次元宇宙を緊縛し、その次元がビッグバンにつながり、宇宙形成すると考えたとき、すべての情報が宇宙に

ばらまかれ、何らかの影響を与えるというような話です（ブラックホールに吸収された情報は復元できるという説もあるので）。

次のアイデア。

これは、「人間原理」的な話に近いかもしれませんが。

１３７億年の宇宙の歴史の中で、人間の知的活動によって物質から宇宙のシステムまでが解読される可能性が出ているとして、発生以来わずか４００万年の人類の知的活動の累進的な高速性がこの宇宙のシステムに影響を与え、場合によっては宇宙過程を変更したり、宇宙の構造を突き破るような可能性がないとは言い切れないかもしれないというアイデアです。

宇宙に、この知的活動という「新しい、異質の」物質過程が生まれたのではないか、というのはどうでしょう？　人間論的にいうと、利己的なＤＮＡは思考を生成する人間存在という物質過程に至ったという――。（日常世界では、ろくでもないのが溢れているような気がしますがネ。）

ただ、「人間原理」にあるすでに設計されたようなニュアンスとは異なり、ここには知的進化のスピードが間に合うかどうかという偶発性を持ってくるのですが。

いずれにしても、あまり人間中心的になると収拾がつかないので、今のところは「実在」という手綱を離さないように考えていこうと思いますが。

（略）

九拝

身体というかたまり

かたまりというのはレベルがあるようだ。

量子というのはかたまりのことだが、極小のレベルでもやはり「量子論的泡の狂乱状態」（私は「物質の眩惑」という）で、質量のないエネルギー（光のこと）が集積しているわけだし、極大では宇宙が大小の物質を集積させているわけで、人間の身体レベルはその間にあって、特に「生命系」の集積する単位である（ここでは、個々の人間の単位における下層の「生命系」、つまり身体構造をいっている）。

身体とはそのような意味で、人間における身体レベルの統合環境といいうる。そして、この統合環境は、「生命系」を統御するわけであるから、「生命系」とそれぞれ独自の単位のかたまりに分岐される。

たとえば、肉体と意識（精神）などもこの統御機能によって支配されている（いいかえれば、統合環境とは統合機能である）。

意識は直接的には脳と関連しあって、脳の各部位と密接に関連しているといわれる。その脳の部位が相対的に独立していることに応じて、多意識、多人格が独立して存在しているようでもある。

肉体に目を転じると、手、足、内臓などの部位（かたまり）から細胞まで階層を下ることができる。細胞などはさらに異生命の合体物から生成されているともいわれ、タンパク質、ＤＮＡなどまで下ることができる。これらを細分化されない肉の単位（ユニット）として、それぞれ独自存在として見ることもできる。

このように、包含‐被包含の構造のつらなりでもある肉は、この構造に宿命的に存在する「抑圧と自由」の「食物連鎖」とも無関係ではない。つまり、最下位のレベルから最上位に向けて打ちつづく自由への闘い（土方巽流にいえば「肉の叛乱」）が永遠に重なり、つづくのである（これを私は解放衝動と名づけている）。

このとき、最下位つまり極小のレベルの単位まで降りることが可能であるとすれば、それは量

子的見方を抜きにすることはできない。ここでは、量子的選択（不確定性）の問題と自由（解放衝動）とが関係すると思われるのである（もしかすると、自由とは不確定性を指すのかもしれない。また抑圧とは「見方」を指すのかもしれない）。

身体とは生命系の過程（機能？）であるが（ここでの「生命系」は類的人間、生物全体を指す）、生命系はさらに宇宙過程のごく細部であり、この宇宙過程はビッグバンという量子レベルに包含されていく。

［人間モデル］

身体（身体機能）：肉と意識の統合機能

肉体

肉：各部位〜細胞

意志？（低）：原生的選択意志（化学的直接反応）

意識：脳・神経などの複雑系による化学的抽象反応

記憶：多層化されたメモリ素子集合

意志（高）：知的活動による複雑化された意志

思考行為：意志の演算部

生命系：多様化、全体化、個別化

ＤＮＡ＝複雑系のエンジン：動物／蛋白合成→細胞→神経→脳

肉への展開

脳への展開（上位の肉体）

記憶部

思考部

（メモ）：利己的なＤＮＡが宇宙の中でビッグ・クランチまで生き永らえようとするならば、ついには肉体を捨て去るという戦略を取らざるをえなくなる。非‐生命系の道を選択することになる。生命系は用済みだというわけである。未来のＤＮＡにとっては、肉体はＤＮＡ過程に過ぎず、食物連鎖というファシズム過程でしかないのかもしれない。これに対して、肉の最下層、意識の最下層、あらゆるものの

アナーキスティックな個別性は生贄になることを断じて許せないのである。われわれは未来のＤＮＡ神の囚われの一部なのか、それともここにしかない反抗するモナドであるのか？

次元のかたまり　3

実在が有限であるならば、次元は曲率を持つために円環を結んでいる。
次元がそれぞれ他の次元すべてに対して直交し、無限であるとするのは仮想的な（人工的な）空間（ユークリッド幾何学）においてであり、実在論的には有限の宇宙における次元は曲率を持つために始点に戻ってくる。これは「時間」についても同様で、直線的な方向性を持つものは、実在論的には曲率を持つはずである。
すべての次元がそれぞれの始点に回帰する、そのことは巨視的には次元がかたまりとなることを示すものである。

跋

これまで上梓してきた詩集がどのような受け取り方をされたかは知らないが、この詩集を編むにあたって、それぞれの制作意図をここに明かしておくことにする。

・初期詩集『浣腸遊び—Enema Game』一九七四年十月二十一日　私家版

詩語、詩句による言語実験。

・詩集『魔の満月』一九七七年九月十三日　書肆山田刊

文、事件（事象）を詩句と見立てて織物を編む実験。

・詩集『緑字生ズ』一九八七年七月三十日　書肆山田刊

詩の生成過程を織物とする実験。

そして、本作品集をあえて詩集と銘打つのは、「思考」自体をポエジーの図柄にしようとしているからで、いずれにしてもすべての詩集が冒険と実験を目指した宇宙織物であることに変わりはない。

二〇〇七年四月　著者識